

## なぜ私は成長ブロック説を採らないのか 秋葉氏に答える(1)

Why I Reject Growing Block Theory  
Rejoinder to Mr. Akiba (1)

加地 大介\*

KACHI Daisuke

本稿に始まる一連の論考では、秋葉剛史氏が拙著『もの：現代の実体主義の存在論』に対する書評論文で提示した五つの批判点に順次回答していく。本稿では、そのうちの「現在主義をとる必要性」という時間論上の論点に対して回答する。

秋葉氏は、A理論を保持しつつ過去の实在性を確保するためには、拙著において採用されている変則的現在主義よりも成長ブロック説の方が望ましい、という時間論的観点からの批判を提示した。これに対し、本稿では、成長ブロック説における過去の实在性の確保方法には存在論的問題があること、また、その問題を解決するために最近提案された成長ブロック説の解釈では、少なくとも筆者の採用するA理論の基準が満たされないことを示す。その帰結として、氏の批判は受け入れられないという回答が与えられる。

キーワード：実体主義、現在主義、成長ブロック説

### §1 はじめに

日本科学哲学会の学会誌『科学哲学』（53-2,2021）において、拙著『もの：現代の実体主義の存在論』（春秋社,2018）に対する秋葉剛史氏の書評論文が掲載された<sup>1</sup>。それは拙著の「内容紹介」を行う第一章と拙著に対する「批判的考察」を行う第二章によって構成されているが、第一章については、著者自身にはとても行えないような見事な要約と痒いところに手が届き尽くしている「注」の細心さに感心させられるばかりであった。そのみならず、いくつかの箇所において、良きにつけ悪しきにつけ著者自身にはなかなか述べにくい事柄を代弁してくれていたことにも、謝意を表明しておきたい。

第二章では、拙著への五つの批判点が提示された。それらは論旨明快に記述されており、各々に対する諾否は別としても、拙著におけるいくつかの中心的主張を真正面から受け止めたうえで正攻法で手厳しく返された、著者にとっていわば「イタ（＝「痛」）気持ちよい」批判であった。本稿に

\* 加地・だいすけ、埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授、哲学

<sup>1</sup> [秋葉 2021]

始まる一連の論考は、それらの批判点に対してこちらもできるだけ真正面から回答することを試みるものである。

氏の五つの批判点とは、登場順に、(a)「〔拙著〕議論方法」、(b)「本質が含む内容」、(c)「力能と実体の関係」(d)「力能および因果に関する代替理論」(e)「現在主義をとる必要性」についてである。これらは概ね拙著における登場順に即しているが、より大きな論点から小さな論点へと移行しているようにも見える。するとそれは、批判を受ける側からすれば、より回答に労力と慎重を要する論点を先行させた順序だとも言える。そこで以下の論考では、順序を逆転して、どちらかと言えば回答しやすいと思われる批判点から回答していくこととする。その結果、本稿は、(e)「現在主義をとる必要性」に関する時間論的な内容のものとなる。

## §2 四次元主義

時間論に関して、拙著では(実在的)過去と(非実在的)未来の存在論的非対称性を主張する点で「非標準的」だと言える「現在主義」の立場が取られているが、秋葉氏によれば、拙著の立場にとっては実は「成長ブロック説」を採用の方が理にかなっている<sup>2</sup>。その理由として、氏は次の三つを順番に挙げている：

- (1)拙著の立場で過去の実在性を確保するには、かなり無理がある。
- (2)拙著が主張する時間の非分岐性・現在時点の最新性は、成長ブロック説とも問題なく整合する。
- (3)拙著がその四次元主義的側面を批判している成長ブロック説は、実は三次元(耐続)主義とも両立するし、存在論的に不安定でもない。

そして以上の理由により、氏は拙著において「現在主義にこだわるべき理由はまだ与えられていない」と結論する(下線は現筆者による。以下、断りが無い限り同様。)。これは言い換えれば、私にとって本来「成長ブロック説」の方が「現在主義」よりも好ましいにもかかわらず、私があえて現在主義に「こだわって」いるという意味で、いわば次善の選択として現在主義が選択されていると氏が解釈しているということである。しかし私にとっては、現在主義は、積極的に選択されるべき立場であると同時に、成長ブロック説は、積極的理由によって拒絶されるべき立場である。その理由を上(1)~(3)と関連させつつ述べるならば、おおよそ以下のとおりとなる：

- (1)成長ブロック説による過去の実在性の確保の方法には、かなり問題がある。
- (2)成長ブロック説は、現在時点の最新性の存在論的意義を喪失させている<sup>3</sup>。
- (3)成長ブロック説は、(本来的な時制主義としての)A理論を標榜しながら実質的には(無時制主義としての)B理論に墮してしまっている。

<sup>2</sup> *Ibid.*, p.311.

<sup>3</sup> 時間の非分岐性についても類似の論点が成立するが、本稿では省略する。

私の推測では、氏が成長ブロック説の方が本来望ましいと考えるのは、氏自身がどちらかと言え  
ば無時制主義的立場を採っているからではないだろうか。だとすれば、時制主義者にとっては、ま  
さしく氏のような同調者を得てしまうこと自体が、成長ブロック説の問題点の核心だとも言える。  
そこで、ここでも(1)~(3)の登場順を逆転させて、(3)から回答していくことにする。

氏によれば、成長ブロック説が「過去世界に関しては四次元主義を標榜する」とする拙著の認識  
は誤っている。氏はその理由を次のように述べている<sup>4</sup>：

というのも、三次元／四次元主義の対立はあくまで実体（物質的対象）の持続の仕方に関わ  
るものである一方、時間論上の対立はできごとやプロセスといった（誰もが非耐続的対象とみ  
なす）対象の実在性と非実在性に関わる物として理解できるからだ。実際サイダー2007は、時  
間の永久主義を確立した後で三次元／四次元主義のどちらを採るべきかを論じているが、もし  
ある時点の実在性を主張することが即座にその時点に関して四次元主義をとることを意味す  
るとしたら、こうした論じ方は意味をなさないことになってしまう。よって成長ブロック説の  
本質は、あくまで過去時点のできごとに対し（A論の枠内で）現時点のそれと同等の実在性  
も認める点に求めることができ（実際例えばForbes2016はそう定式化している）、この立場は  
実体の持続に関する三次元主義とも組み合わせ可能だと考えることができるだろう<sup>23</sup>。

〔上記原註〕23：著者が挙げる成長ブロック説の「存在論的な不安定さ」(249)も、以上の理解  
によって解消するだろう。

ここで述べられている理由の要点を整理すると次のようになるだろう：

- ①三次元／四次元主義の対立はあくまで実体（物質的対象）の持続の仕方に関わるものである。
- ②〔現在主義と成長ブロック説の〕時間論上の対立は、できごとやプロセスなどの非耐続的対象の  
実在性と非実在性に関わる物として理解できる〔という以上に、理解すべきである〕。
- ③成長ブロック説の本質は、あくまで過去時点のできごとに対し（A理論の枠内で）現時点のそ  
れと同等の実在性も認める点に求めることができる〔という以上に、求めるべきである〕。
- ④したがって、成長ブロック説は実体の持続に関する三次元主義とも組み合わせ可能だと考えるこ  
とができる〔という以上に、考えるべきである〕。
- ⑤したがって、成長ブロック説には、拙著が主張するような〔実体の持続に関連する〕存在論的な  
不安定さはない。

この整理からもわかるように、氏の批判は、「①三次元／四次元主義の対立はあくまで実体（物  
質的対象）の持続の仕方に関わるものである」という認識に基づいている。しかしこれに対しては、  
成長ブロック説が抱える重要な問題点を指摘した D.ブラッドン-ミッチェルの次のような叙述を参

---

<sup>4</sup> Ibid. p.311, p.315.

照すれば、少なくとも彼が理解する限りでの「四次元主義」という立場がそのような局所的な対立の中で定式化されるようなものではないことは明らかである<sup>5</sup>：

多くの哲学者たちが、四次元主義の諸特徴を真正な時の流れの説明と共有する時間論に魅力を見出してきた。たとえば、ブロード C.D. Broad(1923)、トゥーリー Michael Tooley(1997)およびフォレスト Peter Forrest(forthcoming [=2004])は少なくとも次のような諸特徴を共有する見解を擁護する。未来は非実在的である：それは存在しない。しかしながら過去は実在する—それは、パルメニデスの全体として正統的な(orthodox)四次元主義者たちが世界をそう見なすようなたぐいの、時空的塊(a space-time volume)である。現在は、実在を境界づける一種の超平面(hyperplane)である。すなわち、それは存在の先端(the edge of Being)である。時の進行とともに、世界の容積は増大する。それを一種の(四次元的)成長サラミだと考えよう。世界は一枚のスライスとして発生し、時が進むにつれて複数のスライスが徐々に付け足されていくのである。

この叙述からまずわかるのは、「正統的な」四次元主義とは、世界そのものについての主張であり、そしてその世界全体をまさしく時空的な「塊」すなわち「ブロック」として捉える主張だということである。つまり本来の「四次元主義」とは、時間的一次元を空間的三次元と基本的に同格に扱う、世界についての「時空主義」というべき立場であり、それを実体的対象の持続のみに限定する用法は、むしろ新奇な用法なのである。実際、実体的対象の持続に関しては「耐続主義」対「延続主義」という用語があるにもかかわらず、なぜそれに加えて抽象的な「三次元主義」対「四次元主義」という用語をあえて必要とするのだろうか？

また、もうひとつ重要なことは、ブラッドン-ミッチェルが、そうした「四次元主義の諸特徴を真正な時の流れの説明と共有する時間論」として成長ブロック説を捉えているということである。つまり、「真正な時の流れ」を中核に組み込んでこそ成長ブロック説と言えるのであるが、秋葉氏が四次元主義の定義を依拠するサイダーは、「時間の永久主義を確立した後で三次元／四次元主義のどちらを採るべきかを論じている」のだということである。だとすれば、「時間の永久主義」とは、まさしく「真正な時の流れ」を全面否定する立場なので、そのような対立的立場を前提として定式化される「四次元主義」とは、そもそも成長ブロック説には受け入れられない定式化だということになるだろう。いわば土俵設定そのものを自陣で行うことによって自らの優位をもたらすという手法は、D.ルイスを初めとする四次元主義者の常套手段でもあり、それに従うことは自ら敵の陣中に身を投ずること以外の何ものでもないからである<sup>6</sup>。

さらに実体主義者としての私にとって非常に違和感を覚えるのは、「実体的対象の持続」というテーマが時間論上のトピックにすぎず、時間論上の基本的スタンスから独立にいかようにも選択肢をとりうる問題であるかのごとく位置づけられていることである。私自身は、実体的対象が基礎

<sup>5</sup> [Braddon-Mitchell 2004] p.199.

<sup>6</sup> この点については[加地 2018] pp.197-201を参照されたい。また、A論者を自認するR. P. キャメロンも、サイダーが提示したB理論的図式の中で自己の立場である「移動スポットライト説」を解釈されることを拒絶している([Cameron 2015] p.128)。

的存在者であるからこそ、持続を中心とするその存在のあり方如何が時間論的な種々の基本的主張そのものを方向付けると考える。

これは秋葉氏の理由付けの②③に関係する論点となる。氏は、現在主義と成長ブロック説の時間論上の対立を「できごとやプロセスなどの非耐続的对象の実在性と非実在性に関わる物」と捉えたうえで②、成長ブロック説の本質を「あくまで過去時点のできごとに対し（A論の枠内で）現在時点のそれと同等の実在性も認める点に求める」べきである③と主張している。まず②について述べると、たしかに私は、特に「できごと」という非耐続的な持続的对象（私の用語では「継続的对象」）については、それが生起した後ただちに消滅すると主張するので、氏のこの特徴づけは間違っている。しかし私自身にとっては、両者の対立がむしろ「もの」という耐続的对象の実在性と非実在性に関わるものであるということの方が、より重要である。

この点を理解してもらおううえでひとつ参考になるのは、F.コレイア&S.ローゼンクランツが紹介する、成長ブロック説の元祖ともいべきブロードの次のような叙述である<sup>7</sup>：

結局のところ、彼 [=ブロード] は、ドーヴァーの崖のようなものでできごとと見なしてしまうような、非常にリベラルなできごと概念を採用していた<sup>8</sup>：

できごとによって私が意味するのは、それがどれだけ持続しようが、それがその歴史の隣接し合う段階において質的に同様であろうが質的に異なっていようが関係なく、とにかく持続するもののすべてを意味している（イタリック体は英語原著者による。以下、断りが無い限り同様。）。

ここで示されているブロードの立場は、「非常にリベラルなできごと概念」のもので、通常は「もの」として分類される崖のような対象をも「できごと」の一種と見做す「できごと主義」とでもいえるべき立場である。つまり、そこでは実体的対象というカテゴリーが事実上消去されているのである。私見では、「延続」という概念のものであっても「もの」の持続を表しうるかのような四次元主義者の主張は、こうしたできごと主義の過激さを隠蔽するための言語的粉飾にすぎないと言っても過言ではない。

このような「私の考え」こそが過激だと思われるかもしれないので、他の論者による最近の論文に見られる類似の主張を引用しておこう。M.エスフェルドは次のように述べている<sup>9</sup>：

もしも、もの(things)を四次元的時空中の世界線(world-line)と同一視するならば、それらのものをできごとの連続的系列という意味でのプロセスと見なすことになる。それらは、時間的部分を持つからである。耐続者(endurants)という意味での実体は三次元的存在者であるのに対し、

<sup>7</sup> [Broad 1923] p.66. ちなみに、ブロードはその後、このようなできごと概念は、アレクサンダーやホワイトヘッドからの影響による「そのたぐいの粗雑さの中でも最悪のもの」だったとして撤回している。[Broad 1959] p.765. なお、この引用文中の「持続する」の原語は'endure'だが、ブロードの時代には現時点で「延続」と対比される意味での「耐続」の用法はなかったため、中立的な「持続」を訳語として用いた。

<sup>8</sup> [Correia & Rosenkranz 2018] p.39.

<sup>9</sup> [Esfeld 2021] p.463.

できごととプロセスは四次元的存在者である。そのような四次元的存在者たちから成る存在論は、それでもなお、もの存在論(a thing ontology)ではある——すなわちそれでもなお、離散的対象の存在論(an ontology of discrete objects)ではある——のだが、しかしそれらは耐続的実体ではなくできごと（プロセス）の系列なのである。

つまりエスフェルドも、＜四次元主義者の意味する「もの」とは、一元論的・全体論的存在論の構成要素としての「唯一の連続の対象」と対比される「複数の離散的対象」という最低限の意味で「もの」と呼ばれうるにすぎず、実質的にはそれは「できごと（プロセス）の系列」でしかない＞と考えているのである。

### §3 成長ブロック説

さて、私やエスフェルドによる以上の分析が基本的に正しければ、成長ブロック説は、実体的対象ではなくできごと（およびプロセス）を基礎的存在者として認定する「できごと主義」を採用していることになる。それを踏まえうえて秋葉氏の③の論点「成長ブロック説の本質は、あくまで過去時点のできごとに対し（A 論の枠内で）現在時点のそれと同等の実在性も認める点にあることができる」を検討しよう。

成長ブロック説の本質に関する氏のこのような特徴づけは、おそらく間違っていない。そして、一般には、それこそが現在主義に対する成長ブロック説の優位性として認められている点であり、氏もそれに同調している。しかし、成長ブロック説が過去時点のできごとに対して「現在時点のそれと同等の実在性」を認めるという点は、実は諸刃の剣である。というのも、過去のできごとに対して現在と同等の実在性を認めた以上、＜では、現在のできごとと過去のできごとの「あり方」はまったく相違しないのか？＞＜結局、現在と過去は何が異なるのか？＞という点について説明する必要が発生するからである。

このような必要性は、過去のできごとの（現在における）実在を否定する現在主義には発生しないと同時に、時制主義全般に対立する永久主義あるいは無時制主義にも発生しないということは、注目に値する。というのも、後者は、そもそもできごとに関わる時制的相違をできごととそのものに関する「実在的」相違だとは見なさないで、そのような説明責任を背負い込むことはないからである。過去のできごとの「あり方」についての説明は、成長ブロック説が現在における時制的相違を重視する時制主義者であるがゆえにこそ求められる、成長ブロック説固有の課題なのである。

そして、このような過去のできごとの「あり方」の問題を非常に効果的な形で示したのが、現在主義者である C.ボーンに始まり、ブラッドン-ミッチェル、T.メリックスらに引き継がれた「成長ブロック説の認識論的問題」である<sup>10</sup>。ただ、この問題は、たしかに「認識論的」問題として提示されることによって効果的な印象を与えることに成功しているが、私見では、その本質はむしろ「存在論的」な次元にある。そして成長ブロック説の側に立ってこの問題に回答しようとする試みには、現時点で、P.フォレストから G.フォーブズに受け継がれたタイプとコレイア&ローゼンクランツに

<sup>10</sup> [Bourne 2002], [Braddon-Mitchell 2004, 2013], [Merricks 2008]

よって示されたタイプの二つがある。そこで次に、少なくとも本来的な時制主義者の立場に立つ限り、これら二つの試みが受け入れられるものではないということを示したい。これは、本稿の冒頭で私が主張した特に次の(2)(3)を裏付けるための作業ということになる：

(2)成長ブロック説は、現在時点の最新性の存在論的意義を喪失させている。

(3)成長ブロック説は、(本来的な時制主義としての) A 理論を標榜しながら実質的には(無時制主義としての) B 理論に墮してしまっている。

そして特に(3)の主張を明確にするためには、その中に現れる「(本来的な時制主義としての) A 理論」「(無時制主義としての) B 理論」の意味を明確にしておく必要があるだろう。私自身は、時制を時間的前後関係に還元してしまう理論、そして少なくともその意味において時制と空間的前後関係との並行性を帰結してしまうような理論を「B 理論」と呼ぶ。そしてそのような還元を行わず、時制的事実の实在性を非還元的に正味で承認するような理論が「A 理論」ということになる。そのような实在性の内実については色々な考え方があるだろうが、拙著で主張されたのは、実体的対象の持続(耐続)に根拠づけられる形而上学的様相の一種である「持続様相」として、実体的対象の「内在的」あり方に関わる实在性であった。

この点において、成長ブロック説と並んで現在主義に代わる A 理論のひとつとされる「移動スポットライト説(Moving Spotlight Theory)」を唱えた R.M.キャメロンと私は意見をまったく異にする。彼は A 理論であるための必要十分条件は、唯一の客観的に特権的な時点としての現在時点が存在するという「特権的現在(Privileged Present)」の主張と、その現在時点は刻々と移り変わっていくという「一時的現在性(Temporary Presentness)」の主張の両方を含意することに尽きると考えた。そのひとつの帰結として、次のように主張している<sup>11</sup>：

A 理論は、A 性質(A-properties)——すなわち、*現在であること*、*過去であること*、*未来であること*——の還元不可能性についての理論ではない。A 論者はもちろん、これらの性質を、*この思考と同時である*、*この思考より以前である*、*この思考より以後である*、のような性質への B 理論的還元を受け入れないだろう；しかし A 論者はそのような還元は存在しないということにコミットする必要はない。A 理論は次のようなことと完全に両立可能である：現在であるということは、神の注目の対象であるということであり、過去であるということは神の注目の対象より以前であるということであり、未来であるということは神の注目の対象より以後であるということである。私はそのような還元は推奨しないが、そのようなことを信じている人がそれによって A 論者である資格を失うとは思わない。

つまりキャメロンにとっては、何らかの客観的な意味で「特権的」だと言える時点として「(移り行く) 現在」を指定することさえできれば、時制が時間的前後関係に還元されても A 理論の資格を

---

<sup>11</sup> [Cameron 2015] p.4.

保っているわけである。私は、時制というものの「本性」をまったく顧みないそのような理論は A 理論の名に値しないと思う。

以上のような A・B 両理論についての確認を踏まえたうえで、時系列に即して、まずはフォレストが論文「実在する死せる過去」において展開した、成長ブロック説擁護の要点について、特に彼の存在論的主張を中心に確認しておこう。フォレストは、彼が提示する「死せる過去」の仮説を次のように説明している<sup>12</sup>：

生命と意識(life and sentience) は活動(activities)であって状態(states)ではないということを私は受け入れる。状態は過去に存在しうが、活動は実在の境界のみにおいて生起する。

------(中略)-----

因果的關係と同様に因果的活動が存在するということは、成長ブロック説に対するさらなるアド・ホックな付け足しではなく、その説を原因は結果に先行するという無害な想定と結合させた結果である。だとすれば、生命と意識は因果的活動であるということは直観的にもっともらしい。したがって過去は死んでいる。

フォレストのこのような説明を、先ほど挙げたくでは、現在のできごとと過去のできごとの「あり方」はまったく相違しないのか？><結局、現在と過去は何が異なるのか？>という問いに対する回答として解釈するならば、<現在のできごとは「活動」として存在するが、過去のできごとは「状態」(あるいは少なくとも「非活動」)として存在する>ということとなるだろう。たしかにこれによって、私たちの「思考」が「(精神的)活動」の一種であることを踏まえれば、実在の先端としての(特権的)現在においてしか自らが存在する時点の特権性への懐疑という「活動」は行えないことになるので、認識論的問題は解決される。しかしその存在論的代償として、まず第一に、時間的生成に伴う「活動としてのできごと」から「状態としてのできごと」への変化という新たな種類の変化を導入せねばならず、第二に、「活動としてのできごと」と「状態としてのできごと」という二種類の「できごと」カテゴリーを承認せねばならない。

第一の代償については、そのような新たな種類の変化を導入した時点で、すでにブロードによる元々の成長ブロック説の精神から離反してしまっている。というのも、ブロードにとって、「生成」とは新たなできごとが「ブロック」に対して世界に続々と追加されていくということ以外の何ものでもなかったからである。そのことは、「現在のできごと」についての彼の次のような説明からも伺える<sup>13</sup>：

現在のできごとの**本質(essence)**は、それが未来のできごとに先行するということではなく、それが先行性という関係を持つようなものは文字どおり*存在しない*ということである。

<sup>12</sup>[Forrest 2004] p.359. なお、この論文中でフォレストは、<特殊相対性理論は、現在主義も含めた「無未来主義(no-futurism)」をパルメニデスの永久主義よりも優位にする>という興味深い主張も行っている(という以上に、そちらの方が中心的主張である)が、本稿では採り上げない。

<sup>13</sup> [Broad 1923] pp.81-82, p.66.



より多くのできごとが生成するにつれて、〔アン女王の死という〕そのできごととは、かつては持っていなかった、そしてそれらのできごとが存在しない間は持ちえなかった、さらなる関係を獲得する。これこそが当該のできごとに対して起こるすべてなのである。

ブロードにとっての生成とは、ブロックの構成単位としてのできごとがただ増加していくという「量」にのみ関わることであって、そのできごとそのものがいわば「変質」するなどという発想はまったく無かったのである。

第二の代償については、「状態としてのできごと」「非活動的できごと」なるものが、そもそも「できごと」たり得るのだろうか、という疑念が沸き起こる。この点については、夙にブロードの成長ブロック説に対して R.M. ブレイクが次のように指摘していたところである<sup>14</sup>。

さて、私は過去のできごとが実在的である(real)と、あるいはそれらが「存在する(exist)」とまで、想定することには何の困難も見出さない(そして実際、それは事実だと私には思われる)が、ブロード氏のように、それらが現在も存在していると、あるいはそれらが生じた時点よりも後のいかなる時点においても存在し続けると、想定することには多大な困難を見出す。というのも、できごとの他ならぬ本性(very nature)とは、それが生起(occurrence)すなわち起きること(happening)だということ、あるいはブロード氏自らが述べるように、「生成(becoming)」であるということである。だからこそ、私にとって理解しがたいのは、できごとが起きていないときにいかにしてそれが時間の中に現実に存在しうるのか、ということである。

ブレイク自身はラッセルの時間論に同調する B 論者であり永久主義者なので、少なくとも B 論者が採用する無時間的あるいは無時制的な意味での「過去のできごとの実在性」を自身も肯定するのであるが、できごとの「本性」に照らしてみれば、ブロードが成長ブロック説によって主張するような時制的な意味すなわち「現在でも存在する」という意味での「過去のできごとの実在性」は承認しがたいということである。これに対して私自身は、このブレイクの後半の主張には全面的に賛成したうえで、時制主義者が想定する本来的な意味での「過去の実在性」を、ブロードともブレイクとも異なる形で何とか確保すべきだと考える。

実際、ブレイクらの批判を受けて、ブロード自身も後年、自ら提示した成長ブロック説における<過去から未来に至る出来事の「共存(co-existence)」>という発想の誤りを認め、いとも簡単に成長ブロック説を放棄してしまった。彼はまず 1937 年の著作の中で、時制を時間的前後関係に還元する理論、すなわち私の採用する意味での「B 理論」を批判する文脈において次のように述べている<sup>15</sup>。

しかし、この出来事の「共存」についてどのように考えるべきだろうか？ 出来事と出来事間

---

<sup>14</sup> [Blake 1925] p.427.

<sup>15</sup> [Broad 1937] p.307.

の関係は、大きさの順序における整数のような、*無時間的な*抽象的对象との類比で考えられているか、左から右への空間的順序における直線上の点のような、*同時的に持続する*個別者との類比で考えられているかのどちらかだと私には思われる。

さらに後年の1959年の著作では、自らの「絶対生成(Absolute Becoming)」の概念を比喻によって説明しようとする試みはすべて悪循環であるとともに特定の比喻には特定の誤った欠陥があると述べ、次のような実例を挙げている<sup>16</sup>：

たとえば「警官の標的(policeman's bulls-eye)」の比喻は、真剣にそれを解釈するならば、まだ置き換わられていない(not yet superseded)ものとするで置き換わられたものが、何らかの意味で、互いに、そして今生起しつつあるものと、「共存する」ということを前提している、さらに、私(=ブロード)が『科学的思考』において真剣に考えていた「新たなスライスの付加によって連続的により長く持続し、成長し続ける」世界の歴史の比喻は、すでに起きて置き換わられた諸段階が、何らかの意味で、互いに、そして現在起きている段階と、「共存する」ということを前提していた。

私の見立てでは、先ほど挙げた、現時点で成長ブロック説の擁護を試みているコレイアらとフォーブズのうち、「活動性」という現在のできごとの特権性を何とか保持するという点でよりフォレストに近く、また、多少なりとも時制主義者の精神を保とうとした形での擁護を試みたのがフォーブズであるのに対し、そのような発想さえ微塵もなく、上の引用部分でブロードが念頭に置いているようないわば完全な「(隠れ)B論者」として成長ブロック説を擁護している(つもりになっている)のが、コレイアらである。

コレイアらは、そもそも「現在性」という基本的時制に依存しない形で次のように成長ブロック説を二つの原理に還元している<sup>17</sup>：

$$(P1) E!x \rightarrow GE!x$$

(〔任意の時点において〕もしも  $x$  が存在するならば、その時点以降のすべての時点で  $x$  は存在する。)

$$(P2) Tx \rightarrow At x, H \neg E!x$$

(もしも  $x$  が時点であるならば、 $x$  において、それ以前のすべての時点で  $x$  は存在しなかった。)

ここで注意すべきは、これらの原理に登場する「E!」すなわち「存在する」という述語が、次のよ

<sup>16</sup> [Broad 1957] p.767. ちなみに、この叙述では「成長ブロック説」に対応する比喻に加えて「移動スポットライト説」に対応する「警官の標的」の比喻も一蹴されているということも興味深い。

<sup>17</sup> [Correia & Rosenkranz 2018] p.43-44.

うに定義されていることである<sup>18</sup>：

$$(D5) E!m \equiv df \exists x(m=x)$$

この定義に登場する存在量子や同一性記号を、他の論理記号と同様、コレイアたちは無時間的な意味で用いているので、この存在概念そのものには現在性は含まれていない。にもかかわらず、上の二つの定義の中で「G」や「H」などの時制演算子の作用域内での原子文として用いられるのは、結局のところ、「E!m」で表される存在概念が時点相対化されているからにすぎない。つまり彼らの成長ブロック説は、前後関係によって成り立つ時点系列を前提として定義されるような説であるという点において、B理論以外の何ものでもない。

彼らは、<自分たちのように「時制を重視(taking tense seriously)」しさえすれば、成長ブロック説の認識論的問題なるものは、擬似問題として解消される>と頻りに主張するのであるが、少なくとも私が想定する意味での「本来的A論者」に言わせれば、コレイアたち自身がまったく時制を重視していない。彼らが重視しているのは、表現の指標性によってもたらされるような時点相対性であり、それは、「いま」のみならず「ここ」「この世界」などへの相対性と同類の相対性にすぎない。ブロードの言葉を借りて言えば、彼らの理論は、「いま」「ここ」「この世界」などによって表される抽象的な意味での「(局所的な)場所」の「共存」関係に関する理論なのである。そのような意味での「時制の重視」であればB理論とも完全に両立可能であり、実際にそれを受け入れているB論者は山ほどいる<sup>19</sup>。コレイラらが成長ブロック説に伴う「存在論的」問題についても「擬似問題」であるかのごとくまったく問題視していないのは、結局彼ら自身がB論者だからに他ならない。

これに対し、フォーブズは、少なくとも存在論的問題としては当該の問題が有意義であることを認めている。そのうえでその問題を解決するために、「活動性」という非指標的な内実の付与によって「現在性」を曲がりなりにも重視していると言える。残念なのは、その「曲がり」方があまりにも無惨だということである。彼は自己の立場を次のように説明している<sup>20</sup>：

フォレストに導かれて私が思うには、成長ブロック説は次のように主張すべきである：何かが活動的である——あるいは、何かをしている、プロセスを被っている、意識的である——かどうかは、外在的な(extrinsic)事柄である。私が意味しているのは、次のようなことである：もしもxがΦしているかどうかを知りたいならば、xが論者の存在論のどの部分に属しているように、単にxだけを見るのではなく、xが立っている関係を見るべきである。特に、どのような

<sup>18</sup> *Ibid.* p.13. このような存在主張の無時間性は、彼らが成長ブロック説における過去の「できごと」の存在主張を、個体が絶滅した「生物種」の存在主張になぞらえていることにも示されている。つまり、彼らにとって、具体的対象としてのできごとの存在主張と抽象的対象としての自然種の存在主張の間に差異はないのである。

<sup>19</sup> この点については、[Zimmerman 2005]を参照されたい。また、時制論理を創出したA.N.ブライアーが、時制論理を時点の前後系列についての論理(現在の可能世界意味論に基づく論理)に還元することの不適切性を主張していたことも思い起こされてよいだろう([Prior 1968])。

<sup>20</sup> [Forbes 2016] p.703.

できごとたちが  $x$  に後続しているかを見るべきである。もしも  $x$  が完全に過去に位置しているならば、 $x$  は  $\Phi$  していない。なぜなら、 $\Phi$  しているための必要条件は、いかなるできごとともそれに後続していないということだからである。

つまりフォーブズによれば、各できごとは、実在の先端としての現在に位置しようがその背後としての過去に位置しようが、その「内在的」性質には何ら変わりが無い。ただ変わるのは自らに続くできごとの有無という「外在的」関係だけである。そしてそのような後続するできごとを持たないできごとだけを「活動的」と呼びうるのである。

このフォーブズの解決方法によってもたらされる成長ブロック説は、たしかに生成によって変化するのはできごとの「量」だけであるとする元々のブロードの成長ブロック説の精神を保持している。しかし、果たしてフォーブズが自認するように、「フォレストに導かれ」た方法だと言えるだろうか。たしかにフォレストも「活動は実在の境界のみにおいて生起する」と述べているので、その限りにおいては彼に同調していると言えなくもないが、忘れてならないのは、フォレストはその主張を「状態は過去に存在しうるが、」という対比とともに言っているということである。つまりフォレストは、できごとが現在から過去に移行することによって「活動的」という内在的性質を失い、「状态的」あるいは少なくとも「非活動的」という新たな内在的性質を得るということを含意しているのである。

さらに言えば、もしもできごと  $x$  が「活動的である」ということが、「それに後続するできごとが存在しない」という外在的関係に関する主張以外の何ものでもないのならば、「活動は実在の境界のみにおいて生起する」というフォレストの主張は、単に「活動的である」ということの「定義」を行っているにすぎないことになる。文脈的にそのような読解はまったくできないし、仮に実際にそうだとしたら、実は成長ブロック説に対して向けられていた批判は何ら解決されていないことになってしまうだろう。それは、できごと  $x$  が「実在の最先端に位置する」という言葉を「活動的である」と言い換えただけであり、何ら存在論的な提案はなされていないことになってしまうからである。できごとの内在的性質が変化していないならば、かつて何らかの意味で「活動」していた対象は今なおその状態を保ったまま「活動」しているということになってしまうであろう。だとすれば、認識論的・存在論的問題の両者がまさしくゾンビのようにまた復活してしまうわけである。

結局のところ、フォーブズも、「活動的」であるということ了他のできごととの先後関係やその有無に還元してしまうという点において、実質的な B 論者であったということである。だからこそ、活動から非活動への変化ということを上記のように内実のない骨抜きのものにすることに何ら抵抗がなかったわけである。フォーブズは、次のように自己の主張を正当化している<sup>21</sup>：

…もしも活動性を外在的であると考えるならば、神秘的な内在的性質を説明する必要性、およ

---

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 705. なお、「なぜ活動性がブロックの先端にこのように体系的に関係しているのかを説明する必要性」は、成長ブロック説固有の問題であり、現在主義には関係ないことに留意されたい。

び、なぜ活動性がブロックの先端にこのように体系的に関係しているのかを説明する必要性が、回避される。進行中の（すなわち現在の）できごとは、未来の潜在性と過去の固定された現実性の間に自然に置かれるように思われる；進行中のできごとは、まさしく一定の固定された現実性（すなわちそれらは既に始まっている）と一定の潜在性（すなわち、それらはまだ終わっていない）を有するできごとなのである<sup>10</sup>。

〔上記原註〕10： この考え方は、アリストテレス『自然学』III.2における説明において示唆されている。ただし、それは、私が擁護している見解がアリストテレスのものであるということではない。

（少なくとも私のような）現在主義者が重視し、積極的に肯定するのは、まさにここでフォーブズが言及しているような「できごと」の本質的「あり方」としての「アクチュアリティ」であり、それはアリストテレスが考えていたと思われる、できごとの様相的内在性以外の何ものでもない。フォーブズは、そのような内在性を「神秘的」だとして忌避したのであるが、それこそ時制の還元主義者としてのB論者に典型的に見られる態度である。だからこそ、上記の原注の末尾において、そのようなアリストテレスの発想からの乖離を認めざるを得なかった（というよりむしろ、そこから積極的に離脱した）ということであろう。

#### §4 過去の实在性

では最後に、拙著の立場で「過去の实在性を確保するには、かなり無理がある」という秋葉氏の第一の批判について検討しよう。たしかに、曲がりなりにも「現在主義」を標榜しながら同時に過去の实在性を主張するという自体にほとんど語義矛盾的な「無理」があることは認めざるをえない。その意味で、もはや私の立場は「現在主義」の名に値しないのかもしれない。個人的には、それならそれで構わない。しかし先にも述べたように、あくまでも時制主義を保持したうえで過去の实在性を主張する限り、その際にそれを「増大し続けるできごとブロック」の实在性として捉えることは、前節で述べた理由により、許容できない。そうである以上、それとは異なる形での過去の实在の意味を提示しなければならない。

そのための基本方針が、まさに前々説で述べた「できごと主義」に対抗する「もの主義」としての実体主義的世界像に則った形で過去の实在性を捉えることである。具体的には、実体的対象（＝もの）は日々刻々と（形而上学的な意味での）年齢を重ねつつ存在する——すなわちR.テイラーの意味で「純粹生成」する——というあり方を本質として持つような存在者であるということ、過去の实在性の根幹に据えるのである。つまり、常に特定の年齢を伴って存在するということが実体的対象の本質の一部である以上、実在する実体的対象が、その実在のための必要条件として、少なくともその年齢分の過去の实在を（現在時点において）「必然化」するということである。

このような発想は、少なくとも私にとっては、当たり前すぎて逆に口にするのが憚られるような根本的な存在論的前提をあえて明示しただけのことであるが、これについても現在の哲学的時間論

の文脈において類似の主張がないわけではない。その一例は、先ほど紹介した移動スポットライト説の提唱者 R. キャメロンによる次のような説明である<sup>22</sup>：

〔恐竜、ひと、月のコロニー、それらが位置する時空領域などの対象(objects)の] 年齢(ages)は、もちろん導入されたものである：それらは、その存在が基礎的と考えられるいくつかの事態の構成要素として要請されたのであった。しかし年齢は、実に多くの仕事をしてくれる：それは、かつてスポットライトが他のどこにあったかを成立させるだけでなく、ものがかつていかにあったか(things were or used to be)についてのすべての真理を成立させる役割を果たすのである。

この説明から、キャメロンも、過去命題に対する真理付与(truth-making)に関する中心的役割を、現在における実体的対象の年齢に対して割り当てていることがわかる。ただし、先に述べたように、彼にとっての「現在」とは、たまたま何らかの客観的な意味でのスポットライトが当たっている「特権的」時点でしかなく、また、実体的対象の年齢もあくまでも理論的「要請」でしかないので、キャメロンが現在における実体的対象の年齢に託した役割は何らかの他のできごとや性質等によっていくらかでも代替が可能だということとなる。実際、そのような批判をコレイアらが行っている<sup>23</sup>。

拙著における、実体的対象の純粹生成を根拠とした過去の実在性の主張に対する秋葉氏の具体的な批判は次のとおりである<sup>24</sup>：

だがこの考えに従うと、例えば 90 億年前の時点が実在的であるためにも、90 億歳（以上）であるような何らかの実体が現時点で存在しなければならない。そのようなものが本当にあるのだろうか。本書で「実体」がかなり限られた種類の対象のみを指す（プロセスや堆積物などは含まれない）ことを考えると、その見通しは明るくないように見える<sup>21</sup>。また少なくとも、90 億年以上の歴史をもつすべての可能世界でそのような「超高齢」実体が存在する必要はないだろう。これに対して成長ブロック説であれば、過去の時点が未来の時点にはない実在性をもつことは、前者の存在と後者の非存在という違いに訴えて単純に説明できる<sup>22</sup>。

〔上記原註〕 21：さしあたり二つの応答が考えられるがどちらも容易な道ではない。一つは、宇宙全体を一つの実体と考える道だが、これは言うまでもなくかなり実質的なコミットメントだ。もう一つは、過去の実在性を単一の実体の年齢によってではなく複数の実体による「年齢継承」（例えば現在 10 歳の実体が誕生した時点である実体が 50 歳だったとすれば 60 年前の時点は実在的と言える等々）によって確保する道だ。しかしこれだと、少なくとも本文中で引用した説明は放棄されているし、またいかなる実体も存在しないような過去時点は存在しないという（もっともらしくないように思われる）帰結は依然として残る。

<sup>22</sup> [Cameron 2015] p.168.

<sup>23</sup> [Correia & Rosenkranz 2018] p. 77.

<sup>24</sup> [秋葉 2021] p. 311.

[上記原註] 22: 一般に、過去命題の真理付与者 truthmaker を与えることは現在主義よりも成長ブロック説の方が無理なくできる。本書 247 頁では、「K-ret-a」と「L\*(K-ret-a)」と「P\*(K-cur-a)」の同値性に訴えて、a の消滅後でも a に関する過去命題が真になる仕組みが説明されているが、そこでのポイントはあくまで命題の真理性の保証であって真理付与者を与えることではない点に注意されたい。

ここで提示されている秋葉氏の批判点は次のように整理できるだろう：

- (1)拙著の立場で過去の実在性を確保するためには、超高齢の実体の存在を要請することになるが、拙著での「実体」は「かなり限られた種類の対象のみを指す(プロセスや堆積物などは含まれない)」ので、それは難しいだろう。
- (2)上記(1)の問題への対処策として、宇宙全体を一つの実体と考える道と過去の実在性を複数の実体による「年齢継承」によって確保する道があるが、いずれも問題を抱えている。
- (3)拙著で提示された、同値性による過去命題の真理の説明では、真理付与者が与えられていない。

<(1)について>

私は拙著冒頭で次のように述べている<sup>25</sup>：

たとえば、本書の少なくともスタート時点での考察対象となる「もの」は、素粒子・場・天体・時空などの基礎的な物理学的対象だけではない。鉱石・食物・家具・建物・山などの、私たちの周囲にある中間サイズの日常的物体、穴、波・境界・虹・影・鏡像のような擬似的物体もそこには含まれる。

私が想定している「(形而上学的)年齢」は、当該の対象のいわゆる「耐続性」さえ認められれば適用できる性質なので、ここで挙げたような実体的対象としての「もの」全般に適用できる。したがって、たしかに「プロセス」には適用できないが、「堆積物」(山もその一種と見なせるかもしれない)であれば問題はない。すなわち、厳密な意味での「実体」である必要はないのである。

さらに言えば、果たして「超高齢な実体」の要請は、それほど難しいことだろうか。伝統的に「第一実体」とも呼ばれる「質料」は、一切生成消滅を伴わないと考えられていた。また、そこまで遡らなくても、量子論が誕生する以前は、当時の「素粒子」に相当する「原子」についても同様の主張が行われていた。また、素粒子自体が生成消滅すると考えられている現在においてさえ、たとえば次のような叙述に類似の発想は見られる<sup>26</sup>：

---

<sup>25</sup> [加地 2018]p.4.

<sup>26</sup> [左巻 2021]p.24.

さて、地球上に登場した生物は、長い間に水中で進化した。ついには陸上にも進出すると、その一種として人類にもなった。生物体をつくる原子は、すべて地球をつくった原子たちだ。その原子たちを辿っていくと、星々の爆発やビッグバンに行き着く。つまり、私たち人は星の子なのだ。

私たちの体をつくる原子のうち一〇億個ほどは、かつてクレオパトラの体をつくっていたかもしれないし、さらにもう一〇億個は仏陀など歴史上の人物からやってきたかもしれない。

過去の実在性を保証する実体的対象は、当該の実体的対象そのものである必要はない。その対象よりも微細な粒度において実体的と見なせるような、その対象の構成部分であっても構わないのである。

#### <(2)について>

秋葉氏が提示している二つの方法のうち、「実体継承」（私の用語では「実体連鎖」）の方法を、過去へのタイムトラベルの不可能性を証明する文脈で、すでにいくつかの文献において私は採用しており、そのことは拙著 353 頁の註 31 で触れられている。過去の実在性との関連では、拙著本文ではさしあたっては最も基礎的な範囲での過去の実在性を確保することどまっているので、たしかに氏が述べるとおり、そのような形での「実体」の一般化は行っていない。したがって、今後はこの方向で理論を一般化していくこととなるだろう。すると問題は、「いかなる実体も存在しないような過去時点は存在しないという（もっともらしくないように思われる）帰結」を受け入れなければいけないということとなる。

しかし、私は、この引用中の「実体」を、先ほど述べたような広い意味での「実体的対象」すなわち耐続性を適用できるという意味での「もの」に置き換えて良いならば、この帰結をむしろ「嬉々として」受け入れる。まさに実体主義的存在論を採用する限り、仮にそのような「過去時点」があったとしても、それは実質的な意味での「過去」に値しない、というのが私の理論のひとつの帰結とも言えるからである。私にとって実体的対象とは、因果的力能の担い手として因果連鎖を支える役割をも果たすものであり、現在時点に存在する何らかの実体的対象から遡っていく実体連鎖が一つも存在しないような時点は、当該の現在時点とは因果的にも無縁の時点だということになる。その意味において、そのような時点は、当該の現在時点にとっての過去時点から排除されても痛みはないのである。

#### <(3)について>

たしかに、現在主義のもとでの過去（および未来）命題に対する真理付与の可能性の問題については、拙著において十分な検討がなされていないことは認めざるをえない。しかし「そこ〔＝拙著 247 頁における、「K-ret-a」と「L\*(K-ret-a)」と「P\*(K-cur-a)」の同値性に訴えて、a の消滅後でも



a に関する過去命題が真になる仕組みの説明] でのポイントはあくまで命題の真理性の保証であって真理付与者を与えることではない」という氏の読解に対しては異を唱えたい。私は次のように述べている<sup>27</sup>：

そしてここで重要となってくるのが、過去様相に関しては、 $K^{\text{ret}}a$ 、 $L^*K^{\text{ret}}a$ 、 $P^*K^{\text{cur}}a$  の互いの形而上学的同値性である（否定命題についても同様）。というのも、現在主義のもとでは、もはや過去時点は存在しないので、 $P^*K^{\text{cur}}a$  に対する最も直接的な真理値付与者はもはや存在しないことになる（ $P^*$ によって指定される時点が現在である場合を除いて）。しかし、これらの同値性によって、 $a$  が現時点において存在するならば、 $a$  自身が  $K^{\text{ret}}a$  の直接的な真理値付与者となり、そしてその命題が  $P^*K^{\text{cur}}a$  と形而上学的に同値であることによって、同時に  $P^*K^{\text{cur}}a$  への間接的な真理値付与者ともなる。そのみならず、さらに  $K^{\text{ret}}a$  と  $L^*K^{\text{ret}}a$  の同値性によって、それ以降のすべての時点すなわち  $a$  がもはや存在しなくなった時点においても  $P^*K^{\text{cur}}a$  と  $K^{\text{ret}}a$  に対する真理値付与が保証されることになる。

すなわち、ここで私は、現在存在する実体的対象  $a$  が「 $P^*K^{\text{cur}}a$  への間接的な真理値付与者」であるという主張を行っているのであり、決して「命題の真理性の保証」だけを行っているわけではないのである。果たして上記のような意味での「間接的」真理値付与者なるものが、妥当な真理付与理論の中で正当性を認められるのか、という点は、今後の検討課題である。

## §5 まとめ

A 理論を保持しつつ過去の実在性を確保するためには、拙著『もの：現代的実体主義の存在論』において採用されている変則的現在主義よりも成長ブロック説の方が望ましい、という時間論的観点からの秋葉氏の批判に対し、本稿では、成長ブロック説における過去の実在性の確保方法には存在論的問題があること、また、その問題を解決するために最近提案された成長ブロック説の解釈では、少なくとも筆者の採用する A 理論の基準が満たされないことを示した。その帰結として、氏の批判は受け入れられないと結論づけた。

### 【参考文献】

[秋葉 剛史 2021] 実体主義の新たな視点——加地大介『もの：現代的実体主義の存在論』を読む——, 『科学哲学』, 53-2, 295-316.

[Blake, R. M. 1925] On Mr. Broad's Theory of Time, *Mind*, 34, 418-435.

[Bourne, Craig 2002] When am I? A Tense Time for Some Tense Theorists?, *Australasian Journal of Philosophy*, 80-3, 359-371.

[Braddon-Mitchell, David 2004] How do We Know It is Now Now?, *Analysis*, 64, 199-203.

[Braddon-Mitchell, David 2013] Fighting the Zombie of the Growing Block!, *Oxford Studies in Metaphysics*, 8,

---

<sup>27</sup> [加地 2018] p.247.

351-361.

[Broad, Charlie Dunbar 1923] *Scientific Thought*, Springer.

[Broad, Charlie Dunbar 1938] *Examination of McTaggart's Philosophy (Vol.II)*, Cambridge University Press.

[Broad, Charlie Dunbar 1959] A Reply to My Critics. In P. A. Schilpp (Ed.), *The Philosophy of C. D. Broad* (pp. 711-830), Tudor Publishing Company.

[Cameron, Ross Paul, 2015] *The Moving Spotlight: An Essay on Time & Ontology*, Oxford University Press.

[Correia, Fabrice & Rosenkranz, Sven 2018] *Nothing to Come: A Defense of the Growing Block Theory of Time*, Springer.

[Esfeldt, Michael 2021] Thing and Non-thing Ontology, *The Routledge Handbook of Metametaphysics*, Springer, 459-467.

[Forbes, Graeme, A. 2016] The Growing Block's Past Problems, *Philosophical Studies*, 173, 699-709.

[Forrest, Peter 2004] The Real but Dead Past: A Reply to Braddon-Mitchell, *Analysis*, 64, 358-362.

[加地 大介 2018] 『もの：現代的実体主義の存在論』, 春秋社.

[Merricks, Trenton 2008] Goodbye Growing Block, *Oxford Studies in Metaphysics*, 2, 103-110.

[Prior, Arthur N. 1968] Tense Logic and the Logic of Earlier and Later, *Papers on Time and Tense*, Oxford University Press, 116-134.

[左巻 健男 2021] 『世界史は化学でできている：絶対に面白い化学入門』, ダイヤモンド社.

[Zimmerman, Dean, W. 2005] The A-Theory of Time, The B-Theory of Time, and 'Taking Tense Seriously', *dialectica*, 59-4, 401-457.

※本研究は、JSPS 科研費 20K0028 の助成を受けたものです。